

論 文

語末からみたスペイン語の語彙

——特にアクセントに関して——

Entorno al final de las palabras españolas

高 橋 節 子

1. はじめに

ここに、二つのスペイン語の逆引き辞書がある。一つは、F. A. Stahl and G. E. A. Scavnicky (1973) であり、もう一つは、I. Bosque y M. Pérez Fernández (1987)¹ である。スペイン語の語彙は語末に関してきびしい制限があるが、この二つの辞書をみているとそれがよく分かる。ちなみに後者の辞書に目次をつけてみると次のようになる。

「a」: 17~243, 「b」: 244, 「c」: 245, 「d」: 247~255, 「e」: 256~326, 「f」: 327, 「g」: 328, 「h」: 329, 「i」: 330~334, 「j」: 335, 「k」: 336, 「l」: 337~355, 「m」: 356, 「n」: 357~394, 「o」: 395~587, 「p」: 588, 「r」: 589~690, 「s」: 691~704, 「t」: 705~706, 「u」: 707~708, 「x」: 709, 「y」: 710~711, 「z」: 712~716

これをみて分かるように、スペイン語の語彙はその大半が「a」「e」「o」「r」で終わり、これに「d」「i」「l」「n」「s」「z」で終わる語を加えればほとんど全てをカバーしてしまうことになる²。

この小論では、I. Bosque y M. Pérez Fernández (1987) をもとに、スペイン語の語彙を語末の観点からみるとどのような特徴があるのかを探ることにする。ただし、語彙は主に名詞を扱うことにし、動詞や形容詞は扱わない。

動詞はすべて「r」で終わり、形容詞の多くも「o」または「e」で終わり、語末に関してはあまり問題がないからである。

語末音は名詞のジェンダーとアクセント規則に影響を及ぼす。ジェンダーに関しては「o」で終わる語は男性名詞、「a」で終わる語は女性名詞という関係がある。また、アクセント規則によると、母音及び「n」、「s」で終わる語は後ろから二番目の音節にアクセントが、「n」、「s」以外の子音で終わる語は最後の音節にアクセントがある、とされる。しかし語彙のレベルで考える限り、この規則が必ずしも全ての場合に当てはまらないことが分かる。

以下、いくつかの特徴的な語末音に関して、アクセントとジェンダーに留意しながら、順次述べていくことにする。

2. 母 音

2. 1. 「a」で終わる場合

「a」で終わる語は膨大な数にのぼるが、その名詞のほとんどが女性形で、後ろから二番目の音節にアクセントを持っている。

語末の「a」にアクセントを持つ語はさわめて少なく、Bosque y Fernándezによるとわずかに62語（単音節の語は除く）しかない³。

「a」で終わる語は女性名詞、という常識に反して、これらの語のほとんどが男性名詞である点は注目に値する。また、これらの語の多くが、南米のインディオの言語、アラビア語、フランス語等の外来語である。bacará（賭カルタ：イタリア語）、almarrá（綿つむぎ機：アラビア語）、tinapá（くんせいの魚：フィリピン）といった具合である。特にインディオの言語から取った語彙が多く、従って、南米産の動植物の名称が目につく。例えば、permaná（とうもろこし酒）、ananá（パイナップル）、guaraná（木の一種）、aguará（きつねの一種）、eirá（大ぎつね）、guazubirá（しか）等

がそうである。

動詞の活用形も考慮に入れると〔á〕で終わるケースはずっと多くなる。直説法未来Ⅲ人称単数形が〔á〕で終わるからである。また、実際には語末子音の d, t, j, c 等はほとんど発音されないから, amistad (友情), frac (えんぴ服) 等は〔amistá〕, 〔frá〕となり, 語末の母音「a」にアクセントが落ちることになる。これは他の語末母音の場合でも同じで, 例えば, vermut〔bermú〕(ベルモット酒), pared〔paré〕(壁) のようになる。

2. 2. 「o」で終わる語の場合

「o」で終わる名詞はほとんど全てが男性形である。アクセントに関して, 「ico」で終わる形容詞のように後ろから三番目の音節にアクセントを持つ語もあるが(irónico, mecánico, etc.), 後ろから二番目の音節にアクセントを持つものが圧倒的に多い。

語末の「o」にアクセントをもつ語は極めてまれで, 登録されているのはわずかに 2 1 語しかない(単音節の語は除く)⁴。それらの多くは外来語であったり(インディオの言語, フランス語), 方言(中南米の一部の地域)であったり, 口語であったりして, スペイン語本来の言葉でないものがほとんどである。ラテン語に起源を持つ語であっても, seó (señor) や reó (reloj) のような俗語である。

ただ, 動詞の活用も考慮すると, 語末の「o」がアクセントをもつケースはかなり多くなる。直説法完了過去Ⅲ人称単数形が〔ó〕で終わるからである。

2. 3. 「e」で終わる語の場合

「e」で終わる語は, 「a」や「o」で終わる語に比べるとジェンダーがはっきりしてはいないが, 全体の約89.2%が男性形で占められている(Bull, 1965:109)。アクセントも, 若干の例外を除けば後ろから二番目の音節に

ある。ただ、「a」や「o」で終わる語と比べると語末の「e」にアクセントが落ちる場合がやや多い⁵。

女性形はほとんどなく、わずかにギリシア語起源の語（acmé, acné）、ウルグアイの地域語（caicobé, aguacafé）、ジプシー語（chipé）にみられるだけである。外来語が多い点では、「a」や「o」で終わる語と共通しているが、特にフランス語からの借用語が目につく。croché（編み針）、carné（身分証明書）、canapé（長いす）、cliché=clisé（ステロ版）等。

動詞の活用も考慮すると、語末の「e」がアクセントをもつケースはずっと多くなる。直説法未来のⅠ人称単数形が〔é〕で終わるからである。

2. 4. 「i」で終わる語の場合

Bosque y Fernández (1987) によると、「i」で終わる語は494語である。（ただし、接辞、アステリスクのついた語、及び熟語は除く）

これらの語をみてすぐ気がつくのは、語末の「i」にアクセントが落ちるケースが非常に多いことである。単音節語の23語を除いた471語で考えると、その中の311語までもが語末にアクセントを持っている。これは、全体の約6割を占める数値になる。また、動詞の活用形も考慮に入れると、直説法完了過去のⅠ人称単数形の語尾も〔i〕で終わるから、実際には語末の「i」がアクセントを持つ確率はさらに高くなる。「a」、「o」、「e」で終わる語が後ろから二番目の音節にアクセントを持つのに比べると大変な違いである。

「i」で終わる語の中には、頻度の高い機能語や副詞も含まれるが、大部分を占める名詞に関しては頻度の低いものばかりである。そして、アラビア語、ギリシア語、イタリア語、フランス語といった外国語からの借用語が多く、特に中南米のインディオの言語からとったものが非常に多い。従って、中南米に特有の動植物や食べ物などの名称が目につく。

例えば、manatí（海牛）、jachalí（ばんれいし）、cocui（りゅうぜつらん）、caví（カビいも）、alcací（野生のあざみ）、agami（野雁）、tití（きぬざる）、

capi (白とうもろこし), capulí (桜桃), charqui (干し肉), cocaví (旅の食料), bingui (りゅうぜつらんの発酵酒), boqui (ボキつた), baguarí (こうのとりの), abatí (芋とうもろこし), acutí (てんじくねずみ) 等, 枚挙に暇がない。

また、頻度が低いせいでスペイン語の語彙としての地位が確立されておらず、ある辞書には載っているが別の辞書には載っていないということがよくある。さらに、語形やアクセントの位置が揺れているものも少なくない。例をあげてみよう。

guadamecí=guadamací=guadamacil=guadamecil (モロッコ草), surubí=suruví (南米産の川魚の一種), setuní=aceituní (唐草模様), rehalí=rahalí (モロッコの農民), rosoli=rosolí=rosol (Cuenca 地方独特の飲物), poleví=ponleví (ハイヒールの型), neroli=nerolí (オレンジの花を蒸留して得られる液), mundinovi=mundonuevo (のぞきめがね), metamorfosi=metamorfosis (変態) 等。

名詞の性に関してはほとんど全てが男性形である。女性形は極めて稀で、おもにギリシア語からの借用語である (paralaxi : 視差, perifrasi : 迂言法, metamorfosi : 変態, 等) ⁶。

2. 5. 「u」で終わる語の場合

「u」で終わる語は Bosque y Fernández (1987) によると 135 語である。アクセントの位置をみると、音節末の「u」にアクセントが落ちるものが圧倒的多数を占めている。単音節語の 18 を除いて考えると、117 語の中で語末の「u」にアクセントを持つ語が 92 もあり、これは全体の約 8 割に相当する数字である。

先の「i」で終わる語の大半がやはり音節末にアクセントを持つことと考え合わせると、母音で終わる語は後ろから二番目の音節にアクセントがある、という規則は 5 つの母音すべてをその射程に入れているわけではないことが分かる。「i」や「u」で終わる語は語の数自体も少なく、しかも頻度の低

い語が多いので、それらは例外として処理されることの方が妥当であり、その意味でこのアクセント規則は立派に機能しているといえる。

「i」で終わる語同様に、名詞の大部分は外来語、それも中南米のインディオの言葉からとったものが圧倒的に多い。nu (大かもしか), patajú (水の木), cauchau (ルーマの実), llaullau (食用きのこの一種), urutau (たちよたか), 等, たくさんある。

ジェンダーに関していえば、ほとんど全てが男性で、女性なのは tribu (種族) ぐらいしかない。これも「i」で終わる語と共通した特徴である。

2. 6. 語末母音にアクセントのある語

こうしてみると、「i」で終わる語と「u」で終わる語との間には多くの共通点が認められる。まず、アクセントは語末の母音にあるのが普通であること。そして、名詞の性はほとんどが男性であること。中南米のインディオの言語を始め外国語からの借用語が多いこと, などである。

また語彙そのものの数が少なく、名詞がほとんどで、それも頻度の低い語ばかりであるのも共通している。従って、語彙としての地位がまだ不安定で、辞書によっては登録されていなかったり、語形自体が揺れていたり、アクセントの位置が定まっていなかったりする。

「a」「o」「e」で終わる語であっても、語末の母音にアクセントがあれば、上に述べた「i」「u」で終わる語と同様の特徴を持っている。つまり、性は男性で、外来語が多く、頻度の低い語が圧倒的である。こうした観点から、「i」「u」で終わる語を特別扱いするのではなく、語末母音にアクセントのある語の特徴としてもっと広い視点から捉え直すことができる。この意味ではスペイン語で語末の母音にアクセントがあるというのはやはり特殊なケースであり、「母音で終わる語は後ろから二番目にアクセント」という規則が生きている由縁である。

3. 子音で終わる語

スペイン語には語末の子音にもきびしい制約がある。通常用いられている単語では「d」「l」「n」「r」「s」「y」「z」くらいしかみられない。そのほか「c」「j」「m」「t」「x」で終わる語もあるが、極めて少数で特殊な語彙がほとんどである。

このなかで「n」と「s」は他の子音とは異なる特徴を持っている。アクセント規則によると、子音で終わる語は最後の音節にアクセントがあるが、「n」と「s」で終わる語は母音と同様後ろから二番目の音節にアクセントをもつことになっている。

以下、この「n」と「s」に焦点を当ててみていくことにする。

3. 1. 「n」で終わる語の場合

「n」で終わる語は Bosque y Fernández (1987) によると 5089語ある（アステリスクのついた語、接辞、及び熟語は除く）。「n」で終わる語は後ろから二番目の音節にアクセントがあるという規則にもかかわらず、実際に後ろから二番目の音節にアクセントがある語は、わずか99語しかない。これは全体の約2%にしかない数値である。残りの98%は実は音節末にアクセントを持っている。

「n」で終わる語がこれだけ音節末にアクセントを持ちながら、「後ろから二番目の音節にアクセントがある」というアクセント規則が有効なのは、一つには頻度が高い語が少ないことがあげられる。sin, en, con, quien, según, quién, alguien といった前置詞や疑問詞等の機能語や, bien, joven, 及び「ción, sión」で終わるいくつかのよく使われる語を除いては、頻度が低い語が圧倒的多数を占めているからである。

しかし根本的な理由は語尾の「n」のもつ重要な文法機能にある。つまり語尾の「n」は動詞の活用形において、主語がⅢ人称複数であることを示すという機能を担っている。「n」で終わる語は頻度が低い語が多いと先に述

べたが、実際の言語活動においては動詞の語尾として非常に多く現れる。後ろから二番目にアクセント、という規則は、語のレベルでの規則ではなく、文法レベルを考慮に入れた規則だということができる。

性に関していえば、「ción, sión」で終わる語は100%女性形だが、それ以外の語では96.3%が男性である。(Bull, 1965 : 109)

「n」で終わる語には外来語や中南米で用いられている地域語も多いが、派生語が目立つのも特徴である。最も多いのは「ción, sión」で終わる派生語で、これは2000語以上もある。そのほか、「ín」や「ón」で終わる派生語もある⁷。

3. 2. 「s」で終わる語の場合

「s」で終わる語は圧倒的に男性形が多いが、例外的に「sis」で終わる語と「itis」で終わる語は女性形で、ほとんどすべてギリシア語からの派生語である。この二つの語尾を持つ語彙を除くと、「s」で終わる語の92.7%が男性形で占められている。(Bull, 1965 : 109)

語尾の「s」は名詞と形容詞に関しては複数を示す機能、動詞の活用に関しては主語がⅡ人称単数であることを示す機能を持っている。「s」で終わる語は後ろから二番目にアクセントを持つというアクセント規則は、語のレベルからだけではなく、こうした文法レベルも含めた規則だということができる。

名詞の複数を示す「s」の機能は一つの単語としてみとめられる語においても非常に多く現れる。

まず、複数としてしか使われない語がけっこうある。例えば *esposas* は手錠という意味だが、*esposa* という単数形はなく、複数形でしか用いられない。そのほか、*arugas* (カミツレ)、*garbias* (シチューの一種)、*nupcias* (婚礼)、*parias* (胎盤)、*exequias* (葬儀)、*bruseles* (ピンセット)、*cucamonas* (おだて)、*arras* (手付け金)、*creces* (かさばり)、*andaderas* (歩行器) 等、枚挙に暇がない。

もう一つ特徴的なのは、複合語における語尾の「s」である。例えば sacacorchas（せん抜き）は、sacar（抜く）+ corchas（コルク）からできており、語尾の「s」は corchas が複数であることを示している。従って sacacorchas 自体は単数であっても語尾が「s」で終わることになる。（ちなみに sacacorchas の複数も単数と同形となる。）⁸

この種の複合語はすべて動詞＋名詞でできており、名詞は動詞の目的語となっている⁹。ジェンダーに関していえば、これらの複合語は基本的にはすべて男性形である。ただ、人間で女性の可能性のあるものについては男女同形となっている。また口語的な表現が多く、辞書によってはまだ確立した語とは認められず載っていない場合もある。

そのほか「s」で終わる語で特徴なのは、派生語が多いことである。特に地名から派生したものが目につく。japonés（日本人，日本語，日本の）< Japón（日本），fransés < Fransia（フランス），inglés < Inglaterra（イギリス），vienés < Viena（ヴェニス），leonés < León（レオン），ginebrés < Ginebra（ジュネーブ），等。この種の地名に関する派生語はすべて音節末にアクセントを持っている。

4. 結 論

スペイン語のアクセント規則では「母音及び n，s で終わる語は後ろから二番目の音節に，n，s 以外の子音で終わる語は最後の音節にアクセントがある」ことになっている。しかし実際に調べてみると，単語のレベルでは必ずしもその規則通りではないことが分かる。母音に関していえば，「i」と「u」で終わる語はその大半が語末にアクセントを持つし，子音に関していえば，「n」で終わる語がやはり語末にアクセントを持ち，例外はきわめて稀である。このように，「i」「u」「n」で終わる語がアクセント規則に逆らいながらも，なおこの規則が有効なのはなぜだろうか。

まず、子音の「n」「s」が例外扱いされているわけはすぐ分かる。「n」は動詞の活用においてⅢ人称複数の活用語尾であるし、「s」はⅡ人称単数の活用語尾であると同時に名詞・形容詞の複数を示すという重要な文法機能を担っているからである。「n」で終わる語はその98%が語尾にアクセントを持つのであるが、それらをすべて例外扱いしてもなお、文法機能を示す「n」の重要性の方がはるかに上回るからである。

母音の「i」「u」で終わる語に関しては、これらの語尾を持つ語の数自体が少なく、かつ頻度の低い語が圧倒的多数を占めているため、例外扱いしやすいことがまずあげられる。また、外来語や借用語が多いことから伺えるように、語末母音にアクセントを持つ語は本来のスペイン語とは認め難いという事実とも関係している。

このことはジェンダーとの関係でも指摘できる。つまり、「i」「u」で終わる語はほとんどすべて男性名詞であるが、これは他の母音においても共通していて、例えば、女性名詞の特徴とされる「a」で終わる語に関しても、そこにアクセントがあれば男性名詞になるという事実がある。そこでは、語末母音にアクセント—外来語—男性名詞という関係が成立しているわけであり、「i」と「u」で終わる語においてはそれが顕著な形で現れているといえることができる。特に、外来語と男性名詞とのつながりは強く、女性形を選択する積極的な理由がなければ男性形として扱われる¹⁰。語末母音のアクセントは、その語が本来のスペイン語ではないことを示す一つの指標であるといえるだろう。

注

1) この辞書は Diccionario de la lengua española, Real Academia Española, Madrid, 1984., および, J Corominas y J. A. Pascual, Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico, Madrid, 1980 から取った102,012語からなっている。後者にのみ記載されていて, 前者には載っていない語にはアスタリスクがついている。

ここでは古語は必要ないので, アスタリスクのついた語彙は以下の考察から省くことにする。

2) もっともここでは動詞の活用形は考えに入れていないから, 実際に現れる語の語尾とは多少異なっている。例えば, 直説法完了過去Ⅰ人称単数形の語尾はアクセントをもつ「i」で終わるので, 実際の言動活動では語末の「i」はもっと増えることになる。

3) guanabá(m), cucubá(m), acá(adv), Canadá(m), soleá(f), agá(m), barahá(f), bajá(m), chajá(m), ajajá(interj), tajá(m), albalá(m·f), farfalá(m), gualá(interj), guamá(m), maracaná(m), alcaná(f), chaná(m), maná(m), permaná(m), ananá(m), guaraná(f), capá(m), tinapá(m), papá(m), chiripá(m), cambará(m), bacará(m), caracará(m), pucará(m), cuajará(m), tarará(m), yará(f), guará(m), aguará(m), camerá(f), piterá(f), guabirá(m), guazubirá(m), eirá(m), araguirá(m), bacarrá(m), almarrá(m), surá(m), asá(adv), garabatá(f), tacatá(m), mamboretá(f), ditá(m), capitá(m), payaguá(m), caiguá(m·f), Jehová(m), mbayá(adj), cayá(m), maracayá(m), susoayá(m), carayá(m), cuyá(m), burucuyá(f), murucuyá(f), tayuyá(f), quizá(adv)

4) quimbombó=quingombó, chacó, seó, chevió, ajó, caló, reló, carló, tremó, chimó, dominó, capó, peñascaró, garó, pororó, pesó, plató, coto, chavó, noyó, superyó, punzó

5) 形容詞や副詞など名詞以外のものと, 単音節の語を除いて考えると以下のようになる。

bebé(m), calembé(m), bombé(m), cumbé(m), caicobé(f), cusubé(m), abecé(m), chimpancé(m), diostedé(m), bedé(m), café(m), aguacafé(f), bufé(m), gaché(m), cliché(m)=clisé(m), quiché(m), croché(m), hincapié(m), buscapié(m), rodapié(m), volapié(m), tirapié(m), puntapié(m), aguapié(m), alzapié(m), sobrepie(m), oripié(m), pitipié(m), tentempié(m), balompié(m), sopié(m), paspié(m), traspié(m), calé(m), chicalé(m), chincale(m), chale(m), rojiclé(m), zalamelé(m), relé(m), jiroflé(m), alquilé(m), cabriolé(m), sansirole(m·f), cuplé(m), chulé(m), rulé(m), acmé(f), consomé

(m), cané(m), acné(f), jiné(m), periné(m), peroné(m), carné(m), parné(m), calapé(m), canapé(m), rapé(m), aguapé(m), saguaipé(m), chipé(f), marcharipé(m), paripé(m), copé(m), taropé(m), cupé(m), irupé(m), tupé(m), yacaré(m), pagaré(m), abonaré(m), moaré = muaré(m), tataré(m), almirré(m), yuré(m), fricasé(m), glasé(m), corsé(m), cubrecorsé(m), requeté(m), comité(m), ecarté(m), bisté(m), obué(m), cascué(m), sifué(m), cristofué(m), magué(m), ñangué(m), cacahué(m), ahuehué(m), coihué(m), pitihué(m), minué(m), chaqué(m), plaqué(m), parqué(m), buqué(m), trueé(m), payé(m))

6) そのほか意味から女性形になったものもある。gachí(女), huri(回教で天国の美姫), lady(レディー), perí(ベルシア神話の妖精, chai(女兒, 売女), ほかに女性形の語は次の7つしかない。palmacristí(とうごま), paní(隠語で水), tarralí(はい登る植物), almejí(モーロ人のローブ), cativí(ヘルペス), espicabardí(甘松), fruí(ぶなの実)

7) 例えば, 縮少辞としての「ín」がある。balín < bala(弾丸), bolín < bolo(棒), collarín < collar(首飾り), camarín < cámara(大広間), banderín < bandera(旗), cafetín < café(喫茶店), maletín < maleta(トランク), 等。そのほか, 動詞から派生した名詞, 形容詞の類: bailarín(踊り子) < bailar(踊る), saltarín(飛んだり跳ねたりする, 踊り子) < saltar(飛ぶ), andarín(足達者な, 飛脚) < andar(歩く), hablanchín = hablantín(場違いなことを言う) < hablar(話す)等がある。

また, 「ón」で終わる派生語の一つに aumentativo(増大辞)がある。例えば trabón < traba, escobón < escoba, tumbón < tumba, mantecón < manteca, troncón < tronco, espaldón < espalda, raigón < raíz 等, 非常に数が多い。「ón」がつかと基本の語が女性形であってもすべて男性形になってしまう。

他にも動詞から派生した形容詞や名詞があるのも特徴的である。例えば, pidón = pedigón(ねだりやな, 欲しがりやの人) < pedir(求める), mandón(横柄な, 横柄な人) < mandar(命じる), holgón(怠け者の, 怠け者) < holgar(怠ける), rasgón(破れ目) < rasgar(裂く), apagón(消えやすい, 突然の消灯) < apagar(消す), arriesgón(危険を冒すこと) < arriesgar(危険を冒す)等, これもたくさんある。

8) 同じ様な例は非常に多い。rompenueces(クルミ割り) < romper(壊す) + nuez-es(クルミ), cortalápices(鉛筆削り器) < cortar(削る) + lápiz-es(鉛筆), pisapapeles(文鎮) < pisar(踏む) + papel-es(紙), espantapájaros(かかし) < espantar

(驚かす) + pájaro-s (鳥), cumpleaños (誕生日) < cumplir (満たす) + año-s (年), trabalenguas (早口ことば) < trabar (もつらせる) + lengua-s (舌) 等。

また、人間に関する複合語もある。cascarrabias (おこりっぽい人) < cascar (割る) + rabia-s (怒り), sacamuelas (歯医者) < sacar (抜く) + muela-s (臼歯), tumbaollas (大食家) < tumbar (倒す) + olla-s (鍋), rompegalas (ボロ服の人) < romper (破く) + gala-s (晴れ着), trotacalles (のらくらの怠け者) < trotar (小走りに歩く) + calle-s (通り), cortabolsas (すり) < cortar (切る) + bolsa-s (バッグ), aguafiestas (人の楽しみに水をさす人) < aguar (水をやる) + fiesta-s (祭り) 等。

ここまでの例では、元の単語から構成された複合語の意味を類推するのは比較的たやすいが、比喩的に用いられて類推が困難なものもある。例えば, papanatas (うすのろ) < papar (すする・飲む) + nata-s (クリーム), pintamonas (へぼ絵書き) < pintar (描く) + mona-s (猿), catacaldos (何にでも首を突っ込む人) < catar (味見する) + caldo-s (肉汁), ablandabrevas (ablandahigos) (でくのぼう) < ablandar (やわらげる) + breva (higos)-s (いちじく) 等がそうである。

9) 稀に「動詞+名詞」という構造を持たない複合語もある。cenaaoscuras (人づき合いの悪い人) < cenar (夕食をとる) + a oscuras (暗がり) で。

10) 教養語としての性格が強いためギリシア語からの借用語は例外である。

参 考 文 献

- Bosque, I. y Pérez Fernández, M., 1987, Diccionario inverso de la lengua española, Gredos, Madrid.
- Bull, W., 1965, Spanish for teachers: Applied linguistics. New York Ronald Press.
- Butt, J. and Benjamin, C., 1988, A new reference Grammar of Modern Spanish, Edward Arnold, London.
- Diccionario de la lengua española, 1984, Real Academia Española, Madrid, Espasa-Calpe.
- 西和辞典(増訂版), 1979, 高橋正武編, 白水社, 東京。
- Stahl, F. A. and Scavnick, G. E. A., 1973, A Reverse Dictionary of the Spanish Language, University of Illinois Press.